

キャリアと文化の心理学

(3) オートエスノグラフィーの特徴と主流の方法論

土元哲平

はじめに

2021年1月2日～1月3日、オートエスノグラフィーとナラティブについてのシンポジウム(“International Symposium on Autoethnography and Narrative; ISAN”)が開催された。新型コロナウイルスの影響もあり、ビデオ会議ツール ZOOM を用いたオンライン上での開催であったが、私(筆者)にとっては願ってもないチャンスであった。私自身、博士論文研究でオートエスノグラフィーを行ったが、Ellis 先生が中心に活動されている学会には、参加した経験がなかった。ISAN 開催の知らせを Facebook 上のグループ International Association for Autoethnography and Narrative Inquiry (IAANI) (旧 : Doing Autoethnography) で発見し、「自己と質的研究会」の仲間も誘って、参加したのであった。なお、「自己と質的研究会」とは、私が 2018 年から続けているオートエスノグラフィーの国内研究会である。

シンポジウムといっても、規模としては学会といっても差し支えないほどの盛り上がりだったと記憶している。Tony Adams 氏の Facebook 上での投稿によれば、230 以上の参加者、20 か国以上、そして 10 以上のタイムゾーンからの参加があったという。EST/米国東部標準時での開催であったため、日本から当日のセッションに参加する場合 23 時～となった。結局、当日のセッションは、Ellis 先生・Bochner 先生のワークショップを拝聴しただけであったが。オートエスノグラフィーの歴史、どんな場所で執筆するか?、どのようにオートエスノグラフィーを書くか、など、実際的な議論ができ大変興味深かった。なお、研究発表自体は Youtube 等の動画サイトでプレゼンテーションを

事前に公開している方がほとんどであったため、いくつか視聴することができた。芸術(中には折り紙を使ったものもあった)、詩、ドキュメンタリー的なものなど、様々な媒体で個人的な語りが表現されており、大きな刺激を得ることができた。

さて、今回から、オートエスノグラフィーの基本的な内容を整理していく。まずは、オートエスノグラフィーを簡潔に説明した上で、現在行われているオートエスノグラフィーの主流の方法論を見ていきたい。

オートエスノグラフィーの特徴

オートエスノグラフィーにとってまず重要な前提は、この用語が特定の「研究方法」や「手順」を指すものではないということである。そうではなく、この語は学問領域や研究アプローチの総称として言及されるものである。

オートエスノグラフィーは自叙伝的な特徴とエスノグラフィー的な特徴を持つ(Ellis, Adams, & Bochner, 2011)。つまり、個人的経験を記述・分析する(自叙伝的な特徴)ことを通して、それらの経験が埋め込まれている文化を理解していく(エスノグラフィー的な特徴)という志向がある。また、autoethnography を、auto、ethno、graphy という3つの要素でも考えることができる。例えば、Adams & Herrmann (2020)はオートエスノグラフィーを次のように定義している。

オートエスノグラフィー的なプロジェクトとは、「自分らしさ・主観性・個人的経験」を、ある1つのグループあるいは文化における「信念・実践・アイデンティティ」の「記述・解

「積・表象」を行うために用いるものである(p.2: カギ括弧は引用者)

なお、この定義の原文においては、「自分らしさ・主観性・個人的経験」が auto、ある1つのグループあるいは文化における「信念・実践・アイデンティティ」が ethno、「記述・解釈・表象」が graphy というオートエスノグラフィーの構成要素を示している(Adams & Herrmann, 2020)。

オートエスノグラフィーの主流な方法論

さて、オートエスノグラフィーには、現在2つの主流の方法論がある。これを整理すると図1のようになる。以下、これら2つの志向について述べていく。

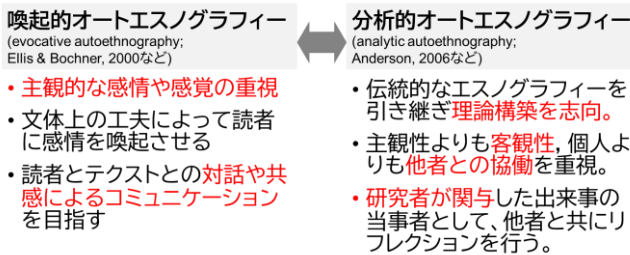


図1 オートエスノグラフィーにおける主流の方法論

喚起的オートエスノグラフィーにおいては、研究者の主観的な感情や感覚が重視される。また、単に自己の経験を記述することを目的とするものではなく、論文の読み手が「読者が、自分の視点から、自分の生活経験に由来する観点から、対話へと参加できる」(Ellis & Bochner, 2006/2000, p.148)ことが重要である。つまり、読者が自らの経験を内省したり、感情を喚起することを目指す。この意味で、オートエスノグラフィーは、テキストと読者との対話を促す媒体として位置づけられ、その表現は文学的・芸術的なものとなる。例えば、他者の物語を読むことで、共感できる部分もあれば、反感を持つ部分もあるかもしれない。そのようにして、論文では成し遂げづらい、読者との対等な関係の中で、対話的に知が生成されるプロセスが

重要なのである。

喚起的オートエスノグラフィーとは対照的に、分析的オートエスノグラフィー(Anderson, 2006)では、主観性よりも客観性、個人よりも他者との協働を重視している。また、伝統的なエスノグラフィーを引き継ぎ、理論構築を志向する。分析的オートエスノグラフィーの鍵となる特徴は、(1)完全な成員としての研究者(Complete Member Researcher)の状態、(2)反省(再帰性)への持続的な注意、(3)研究者の自己物語の可視性、(4)自己だけでなく“データ”や“他者”との対話、(5)理論的分析への献身、であるとされる(Anderson, 2006, p.378の表現を一部変更)。分析的オートエスノグラフィーは、「個人」に焦点化しすぎないために、「完全な成員としての研究者」としての内的視点や、研究プロセスにおける他者との協働的な内省を強調する(Anderson, 2006)。

オートエスノグラフィーの方法論の広がり

喚起的オートエスノグラフィーと、分析的オートエスノグラフィーの両者は排他的で分離されたものというより、連続体(スペクトラム)とみなされている(Allen-Collinson, 2013; Chang et al., 2013)。したがって、現在では、ほとんどのオートエスノグラフィーが「喚起-分析」という連続体のどこかに位置づくと考えられている。

一方、2000年以降、様々な志向を持ったオートエスノグラフィーの方法論が登場している。例えば、2人の研究者が対話的にオートエスノグラフィーを記述するデュオエスノグラフィー(Norris et al., 2012; Sawyer & Norris, 2013)や、複数人でオートエスノグラフィーに取り組む協働的オートエスノグラフィー(Chang et al., 2013)などがある。これらの新しい方法論は、それぞれが異なる志向を持つため、「喚起的」か「分析的」と単純に整理することが難しくなりつつある。したがって、今後はそのような方法論の広がりを踏まえたオートエスノグラフィーの展開可能性を考えていく必要がある

といえる。

Sawyer, R. D., & Norris, J. (2013) *Duoethnography*.
Oxford University Press.

まとめ

本稿では、オートエスノグラフィーの主流の方法論である、喚起的オートエスノグラフィーと、分析的オートエスノグラフィーについて整理してきた。それぞれの方法論が、オートエスノグラフィーにとって重要な側面を示しているが、現代においては、この2つに限らず様々な方法論が試みられるようになっている。

引用文献

- Adams, T. E., & Herrmann, A. (2020). Expanding Our Autoethnographic Future. *Journal of Autoethnography*, 1(1), 1-8.
- Allen-Collinson, J. (2013) Autoethnography as the Engagement of Self/Other, Self/Culture, Self/Politics, and Selves/Futures. In *Handbook of Autoethnography* (pp. 281–299). Left Coast Press.
- Anderson, L. (2006) Analytic autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35(4), 373–395.
- Chang, H., Ngunjiri, F., & Hernandez, K.-A. C. (2013) *Collaborative autoethnography*. Routledge.
- Ellis, C., and Bochner, A. P. (2000) Autoethnography, personal narrative, reflexivity: Researcher as subject. In N. K. Denzin and Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of qualitative research* (2nd ed.) Thousand Oaks, CA: Sage, 733-768. 藤原顕(訳) (2006) 自己エスノグラフィー・個人語り・再帰性—研究対象としての研究者. 質的研究ハンドブック 3 巻. 北大路書房, 129-164.
- Ellis, C., Adams, T. E., & Bochner, A. P. (2011) Autoethnography: an Overview. *Historical Social Research/Historische Sozialforschung*, 36(4), 273–290.
- Norris, J., Sawyer, R. D., & Lund, D. (2012) *Duoethnography: Dialogic methods for social, health, and educational research*. Left Coast Press.